

イタリアとブレグジット

—二つのポピュリスト政党を中心に—

八十田 博人

共立女子大学国際学部教授

はじめに

イタリアはEUの原加盟国でありながら、いわばEUの問題児であり続けてきた。70年代と90年代にイタリア・リラの欧州通貨制度(EMS)からの二回の離脱を招き、ユーロ導入後も、2010年に始まるユーロ危機では実務家政権による緊縮政策で辛うじてEUの直接支援を免れたように、財政危機で何度もEUの足を引っ張り、EU法やEUからの補助金の国内実施でもミスや遅れが目立った。

しかし、イタリアでEUやユーロから離脱する意見が世論で多数を占めたことは一度もない。確かに今日のイタリア人は、最新のEUの世論調査ユーロバロメーター(2019年春調査)の「EUを信頼しているか」という間に37%が「信頼している」(EU平均44%)、55%が「信頼していない」(同46%)と答えているように、EUへの期待感は薄い(European Union, 2019a)。しかし、「ユーロはあなたの国に

とって良いものか」という質問には「はい」と答えるのが55%(EU平均65%)で、これに「いいえ」と答える人も増えてはいるが、36%(同26%)であり、根本的にはEUとユーロを支持している(European Union, 2019b)。

また、イギリスが離脱していくなかで、EUの政策決定過程においてもユーロ圏第3位のイタリアの影響力は小さくない。しかし、これまで基本的には欧州と協調してきた中道右派のフォルツァ・イタリア、中道左派の民主党というかつての二大政党への支持が減退し、右派の同盟と左派の五つ星運動という二つのポピュリスト政党の台頭が、イタリアとEUの関係を不安定にしているのは間違いない。本稿では、特にこの二つの政党に注目して、イタリアのブレグジットへの反応と、それに並行して起こる、EUにおける位置取りの変化について考えてみたい。

イギリスの国民投票に対する反応

イタリアがEUやユーロを離脱するのではないかという報道が、イギリスの国民投票の前後に日本でも欧州でもあったのは、たとえば2013年の総選挙で国会に進出し、2018年総選挙まで人気上昇していった左派ポピュリスト政党「五つ星運動」の指導者であるベッペ・グリッロが、ことあるごとにユーロと緊縮政策を批判していたことにも一因はあるだろう。五つ星運動だけでなく右派も含む著者たちのユーロ批判本¹も書店に多く並んでいた。

やそだ ひろひと

東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学。修士(学術)。専門は、イタリア政治外交、EU統合論。日本学術振興会特別研究員、大阪大学大学院国際公共政策研究科研究員を経て、現職。

著書に『戦後民主主義の青写真 ユーロッパにおける統合とデモクラシー』(共著、ナカニシヤ出版、2019年)、『ヨーロッパの政治経済・入門』(共著、有斐閣ブックス、2012年)、『比較外交政策:イラク戦争への対応外交』(共著、明石書店、2004年)など。

しかし、五つ星運動のEU・ユーロ批判言説をみると、実際の経済的メリット・デメリットの計算よりも、国民投票という直接民主主義の手段そのものに彼らが注目していたことを見逃してはいけない。既存メディアに頼らず、ブログと野外集会を連動させ、選挙の候補者や政策もネット投票・意見交換システム「ルソー」で決定してきた彼らが主張していたのは、ユーロについて残留か離脱のどちらにするか、国民に判断を求める諮問的国民投票の実施であり、離脱の結論ありきではなかったのである(八十田、2019)。

むしろ、イギリスの国民投票で離脱多数という結果が出ると、五つ星運動には動揺が隠せなかった。国民投票の直後にテレビの討論番組「バッラロ」に出演したルイジ・デマイオ下院副議長(当時、五つ星運動執行部メンバー)は、司会者に「イタリアはユーロに残留すべきか、離脱すべきか」と問われ、「イタリア市民が諮問的国民投票で決めるべきだ」と答え、司会者から「あなたたちはどちらの考えのですか」と重ねて問われても、「ユーロに関する諮問的国民投票(を推進する立場)だ」と答えたほど、歯切れが悪かった²。

イギリスの国民投票で離脱派が勝ったことは、五つ星運動への追い風にはならなかったのである。国民投票直後の6月24日に行われたイクセ(Ixe)社の世論調査では、当時第一党の民主党支持が31.2%に対し、五つ星運動は29.0%と互角の水準までに迫っていたが、前回調査からの伸びは1%にも満たなかった。イギリスの決断を「誤り」と考える人は54%（「正しい」は30%）、イタリアにとって「悪い結果」だと考える人が53%（「よい結果」が33%）、イタリアが欧州統合支持を続けるべきと考える人が67%（「続けるべきでない」が29%）であった。さらに、イタリアのユーロからの離脱の是非を問う国民投票を実施することに反対する人は68%（賛成は28%）であり、五つ星運動が提案する諮問的国民投票についても、54%が反対（賛成は40%）であった³。

もちろん、グリッロのブログでは、国民投票後もユーロ批判は続いた。しかし、全体的な傾向として

は、イギリスの離脱が現実化すればするほど、イタリアのEU・ユーロ離脱の議論はしぼんでいったといえる。一方、国内政治では、この年の後半、五つ星運動は、中道左派の改革派レンツィ首相(民主党)が仕掛け、大差で敗れた憲法改正国民投票で、反対派の主役となることで、その直接民主主義的な思想を実践することができた。

左右ポピュリスト連立政権とEU

2018年総選挙は、五つ星運動のデマイオ、同盟のサルヴィーニという二つのポピュリスト政党の若いリーダーの変化を求める勢いが既存政党に勝った。左右のポピュリスト政党による連立政権は、五つ星運動に近い大学教授(非議員)のコンテ首相を二人の党首が副首相として支える形を取ったが、議席数で勝る五つ星運動よりも既に中道右派政権や地方政権で経験豊富な同盟が相対的に大きな影響力を持つ場面がまま見られた。両党とも国内景気重視で、ベーシック・インカム(五つ星運動)とフラット・タックス(同盟)という、いずれも財政拡張要因となりうる公約を連立協約に持ち込んだだけに、EUとの財政政策をめぐる多少の軋轢は覚悟のうえであった。しかし、最終的に当初よりも小幅な財政赤字にとどめることでEUと妥協したのは、これまでのイタリア政治のパターンを踏襲したものといえる。つまり、EUと国際金融界の監視下にあるイタリアはEUと本気で争うことはできないのである(八十田、2018)。

EU各国が危惧したのは、五つ星運動よりも、同盟の政治姿勢であった。同盟は、ユーロ危機下の緊縮政策を行ったモンティ首相率いる実務家政権を支持せず、2013年総選挙後の左右大連立政権にも参加せず、既存の政治勢力に対する挑戦者としてのイメージの確立に成功していた。とりわけ、同盟の周辺には、クラウディオ・ボルギ(現下院議員)やアルベルト・バニヤイ(現上院議員)などのユーロ離脱の論客がいて、本気でユーロ離脱を考えていると思わせるものがあつた。連立政権の経済・財務相に当初、ユーロ懐疑派の経済学者パオロ・サ

ヴォーナを推したのも同盟であり、マッタレッタ大統領の反対にあつてこれを退けたものの、欧州担当相に取まったサヴォーナが「ユーロのプランBはない」と言明したにも関わらず、離脱のシミュレーションをしているのではないかと憶測された⁴。

同盟はイギリスの離脱派よりも、五つ星運動を含む他党が批判的にとらえていた米国のトランプ政権とのイデオロギー的親近感(反グローバル、反イスラム)を隠さなかった⁵。しかし、五つ星運動と同盟には共通点もあり、とりわけ安全保障政策で両党の消極性が目立った。両党とも、シリアへの介入やロシアへの制裁には極めて消極的であり、今後EUとイギリスの協力関係を維持するためにもNATOを通じての安全保障面での協力が重要と思われるだけに、外交上のイタリアの可能性を狭める方向に進むことが危惧された。

欧州議会選挙後のポピュリスト両党の分岐

2019年5月の欧州議会選挙を前に、五つ星運動は、同盟に比べて欧州統合に前向きであることを強調するようになった。同年1月の五つ星運動のマニフェストの発表の際、ディマイオ党首は、「われわれのマニフェストは、ポピュリストや主権主義者とは関係がない」とし、「右派、左派に失望した反エスタブリッシュメントの投票者の支持を得たい」と期待を述べた。EUについては、「イタリアはユーロ離脱を意図しない。私が閣僚である限り、常にイタリアはユーロと欧州に留まることを保証する」と明言するなど、同盟に比べ、EUとの協調を図る姿勢が目立った。

一方、同盟は5月にミラノでの野外集会にフランスのマリーヌ・ルペン国民連合党首やオランダのウィルダース自由党党首など欧州議会で共同会派を組む欧州各国の右派ポピュリスト政党の代表を集め、自らを「主権主義者」だとする立場を明確にした。既存のエリートが欧州を誤った方向に率いているのであり、彼らは主権国家の連合としての「真の欧州」に再編することを目指すとし、自らは「反欧

州」ではないという論理構成を取ったのである⁶。つまり、主権主義者たちは、イギリスのEU離脱に追随するのではなく、その国家主権の主張や「人民」の意思表示に共感するのであって、欧州を自分たちが望む方向に変えるのだと主張した。

選挙結果は同盟が躍進し、五つ星運動への支持は拡大しなかった。ここで問題になるのは、新しいEUの主要人事にイタリアから誰を送るかという選択に、連立政権内で同盟の影響力が増すことであった。イギリスの離脱によってイタリアのEU内における比重は相対的に増すので主要ポストのうち一つは十分期待できた。最終的にイタリアには社会民主進歩同盟所属のサッソーニ(民主党)へ欧州議会議長のポストが回ってきたが、当初、仏独などから欧州理事会議長のポストも提示されていたが、EU各国が望む民主党の首相経験者、エンリコ・レッタやパオロ・ジェンティローニを当時のイタリアのポピュリスト政権が推しそうでないと退けられたと観測されている。

左派連立政権の成立

イタリア国内では、高速鉄道の建設などをめぐり、連立両党の対立が激しくなった2019年8月、同盟が上院に内閣不信任案を提出したが、採決は見送られ、コンテ首相が政権危機について議会で弁明することになった。この演説は、連立政権の終焉を告げ、政権危機を起こしたサルヴィーニは自己と自党の利益を追求したと批判し、民主党との連立を見越し、次の政権に必要な政策も挙げた。その中で、コンテ首相は、欧州議会選挙後のEUの人事が進行するなかで同盟が政権危機を起こしたことはイタリアに不利益を及ぼしたとし、今後のEUについては、財政的拘束よりも成長を重視した、「もっと持続可能で、連帯的で、包摂的で、市民に近い欧州」が必要だと述べた⁷。

同盟が求める総選挙を避け、予算編成の重要な時期に国内情勢の不安定化を避けた五つ星運動と民主党によるEUに協調的な新たな左派連立政権の成立により、イタリアはEU側も歓迎するジェン

ティローニ元首相を経済担当の欧州委員に送ることができた。これは同時に、向こう5年間は、同盟などの右派が推す欧州委員を送れなくなったことを意味する。同盟の態度も政権交代後に軟化し、サルヴィーニ党首は、同盟を含む右派はEUやユーロ離脱を考えておらず、二度とそのような議論を起さないと声明している⁸。ただし、これについても、数日後には「何も不可逆のものはない」と矛盾することを述べており⁹、総選挙になれば第一党になるのが確実視される同盟の動きは注視すべきである。

もともとイタリア人は他の欧州諸国同様に、イギリスには親近感を持っている。在ローマ英国大使館が調査会社SWGに依頼した世論調査によれば、大半のイタリア人は両国が貿易やビジネス、科学・文化・芸術で密接な関係を維持することを望んでいる。しかし、イタリア人は、英国の離脱プロセスの長期化を見て、イギリスが誤った選択をした(57%)と考え、イギリス人は離脱を理性(24%)よりも感情(64%)を優先して決断したと捉えているのである¹⁰。このような世論を見る限り、ポピュリスト政党の派手な言上げにもかかわらず、イタリアがイギリスに追随することは考えにくく、対岸の危機を半ば反面教師として見ているというのが、現状といえるだろう。■

《注》

- 1 代表的な著作が、Alberto Bagnai, *Il tramonto dell'euro*, Imprimatur, Reggio Emilia, 2012
- 2 Alessandro D'Amato, "M5S, Europa e referendum sull'Euro: lo strano caso del punto 10 sulla Brexit cambiato", *Next Quotidiano*, 2016.6.23.
- 3 同書。
- 4 Roberto Petrini, "La Nuova Lira stampata in segreto: il Piano B del quasi", *Repubblica*,

2018.5.28, https://rep.repubblica.it/pwa/generale/2018/05/29/news/la_nuova_lira_stampata_in_segreto_il_piano_b_del_quasi_ministro-197638132/

- 5 2018年2月22日、ローマ市内で行われた国際問題研究所(IAI)・国際政治研究所(ISPI)共催の4党(民主党、五つ星運動、同盟、+ヨーロッパ)の外交政策担当者による討論会でのジョルジュッティ下院議員(同盟)の発言。発言内容は筆者のメモによる。
- 6 筆者は2018年5月18日にミラノのドゥオーモ広場でこの集会を聞いた。
- 7 コンテ首相の上院での演説の全文は、"Giuseppe Conte, il discorso integrale al Senato", *Il Messaggero*, 2019.8.20, https://www.ilmessaggero.it/politica/crisi_di_governo_giuseppe_conte_discorso_completo_senato-4685616.html
- 8 Angelo Amante, "Italy's euroskeptic leader Salvini says euro is 'irreversible'", Reuters, 2019.10.14, <https://www.reuters.com/article/us-italy-politics-salvini/italys-euroskeptic-leader-salvini-says-euro-is-irreversible-idUSKBNIWT1R2>
- 9 Matteo Salvini, "Mai detto che l'euro è irreversibile", *La 7*, 2019.10.24, <https://youtu.be/mLnn0WHTCx0>
- 10 "Brexit: What Italians think of the UK", *Wanted in Rome*, 2019.9.27, <https://www.wantedinrome.com/news/brexit-what-italians-think-of-the-uk.html>

《参考文献》

- 八十田博人(2018)「南欧危機は再燃するか(上) イタリア、ユーロ離脱望まず(経済教室)」『日本経済新聞』2018.7.12
- 八十田博人(2019)「左派ポピュリスト政党としての『五つ星運動』(issues of the day)」『公研』(公益産業研究調査会)2019年6月号(第57巻第6号)、pp.82-83.
- European Union (2019a), Standard Eurobarometer 91, Public opinion in the European Union, First results, Spring 2019.
- European Union (2019b), Flash Eurobarometer 481, Report, November 2019.

